



Title	〈推定表現〉と〈質問表現〉の交渉
Author(s)	高山, 善行
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1986, 20, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

△推定表現▽と△質問表現▽の交渉

高 山 善 行

はじめに

従来、△推定▽△推量▽という△判断のムード▽の意味は、文末辞によってになわれてゐる、ととられてきた。

しかし、文表現において、それらの文末辞が単独で、△推定する▽△推量する▽という表現意図を積極的に実現しているとはみとめがたい。また、そうみとめてしまうと、文末辞の意味的差異を指摘するにとどまり、文の表現性は見えてこないようにおもわれる。

そこで、本稿では、△推定表現▽と△質問表現▽の交渉をとおして、文末辞の意味的差異ととらえられてきた△推定▽と△推量▽を△推定すること▽△推量すること▽という表現意図のレベルに位置づけて、両者の表現性のちがいをあきらかにしようとこころみる。

図(1)

推定表現	推量形	(現) ダロウ (古) ム, ラム, ケム, マシ
	推定形	(現) ヨウダ, ハズダ, ミタイダ, ラシイ カモシレナイ, ニチガイナイ (古) メリ, ナリ (推定), ベシ, ラシ

※ (現)……現代語
(古)……古典語

一・一 推定表現の範囲

最初に、今回とりあげる△推定表現▽の範囲をしめしておこう。森重敏(1959)、国立国語研究所(1960)でしめされているように、△推定表現▽には、

- (1) 文末辞によるもの
- (2) 助詞ト+思考・認知にかかる動詞によるもの

の二つがある。具体的な形式は、

- (1) ダロウ、ヨウダ、ハズダ、ミタイダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ／以上現代語 ム、ラム、ケム、マシ、メリ、ナリ (推定)、ベシ
ラシ／以上古典語
- (2) トオモワレル、トミエル、トミル……／以上現代語 トオボユ、トミル、トミユ……／以上古典語

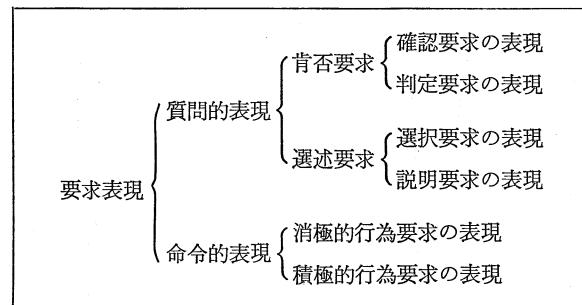
であり、(1)と(2)の意味的なレベルがちがつてることとは、

- ① 雨が降るにちがいないとおもわれる。
- ② 足が弱っているらしいとみえる。

のような共起の用例の存在によってあきらかであって、両者を一括してあつかうことはできない。今回は、文法的形式による表現の(1)のみを考究の対象とし、(2)

<推定表現>と<質問表現>の交渉

図(2)



は別稿にゆずることにする。

ところで、(1)のなかには従来、 \wedge 推量 \vee ととらえられてきたものと、 \wedge 推定 \vee ととらえられてきたものが混在している。説明の便宜上、前者を \wedge 推量形 \vee 、後者を \wedge 推定形 \vee と仮称しよう。それぞれ、 \wedge 推量表現のための文法的形式 \vee \wedge 推定表現のための文法的形式 \vee の意である。(図1)

一・ニ 質問表現の範囲

次に、本稿であつかう \wedge 質問表現 \vee の範囲をしめしておこう。国立国語研究所(1960)では、 \wedge 質問表現 \vee を \wedge 要求表現 \vee の体系のなかで位置づけている。(図2) 本稿はこれにもとづき、 \wedge 質問表現 \vee として、 \wedge 確認要求 \vee \wedge 判定要求 \vee \wedge 選択要求 \vee \wedge 説明要求 \vee の四種の表現をとりあげて、それぞれについて \wedge 推定表現 \vee との交渉を見ていくことにする。なお、南不二男(1985)の立場にもとづき、質問の形式をしていながら、 \wedge つぶやき \vee \wedge 気づき \vee \wedge 反語 \vee \wedge 勧誘 \vee \wedge やわらかい命令 \vee \wedge 婉曲 \vee などを表現するものは、 \wedge 質問表現 \vee としてはとりあつかわない。

二・一 △推定表現▽と△質問表現▽の交渉の実態

二・一・一 説明要求の表現

△説明要求▽の表現とは、

(3) いつ旅行に行くの?

(4) どこへ案内しようか?

のように、イツ、ドコ、ダレ、ナニ、ドレといった△不定詞▽をつかって、その表現の内容を説明することを相手にもとめるものである。△推量形▽△推定形▽は、この表現とどのようにかかわるだろうか。

△推量形▽は、

(5) いつ試合が始まるのだろう?

(6) だれが先発するのだろう?

(7) なにがおこるのだろう?

(8) どれを使えばいいのだろう。

のように、無理なく生起できる。それに対して、△推定形▽は、

(9) * なにが始まるようだ / はずだ / みたいだ / らしい / かもしれない / にちがいない?

のように、すべて不自然である。⁽²⁾

では、古典語ではどうだろうか。古典語では、イツ、イヅク(イヅコ)、タレ(タ)、ナニ、イヅレ……などの

<推定表現>と<質問表現>の交渉

△不定詞▽によつて、△説明要求▽の表現がなされていたとおもわれる。

まず、△推定形▽は、

(10) かく人迎へたまへり、と聞く人、「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」とささめく。
(若紫)

(11) 中将「いつまた対面たまはらんとすらん。さりともかくてやは」と申したまふに、
(須磨)

(12) 富旨「禊を神はいかがはべりけん」など、はかないことを聞こゆるも、
(朝顔)

(13) また、源氏「かかる世の古事ならでは、げに何をか紛ることなきつれづれを慰めまし。」
(笛)

のように、ム、ラム、ケム、マシ、すべて△不定詞▽と共起している。

ところが、△推定形▽はベシを除けば、メリ、ナリ、ラシ、いづれも△不定詞▽と共起しない。『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』の四作品中、ベシ以外の△推定形▽が△不定詞▽と共起しているのは、次の二例のみであった。
(3)

(14) く、思しけざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ。なのにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふ
める。ましてことわりなり。
(葵)

(15) 内大臣「さて、いかが定めらるる。親王こそまつはし得たまはむ。」などのたまひては、
(常夏)
これらは例外で存疑とするにとどめる。なお、ベシは△推定形▽とはいえ、他の△推定形▽とは性格がちがつたものである。これは、考究がすすむにしたがつてあきらかになるであろう。

以上、現代語においても古典語においても、△説明要求▽の表現にかかるのは△推量形▽であり、△推定形▽はこれにかかわらないという事実がみとめられる。

二・一・二 判定要求の表現

△判定要求▽の表現とは、

(16) 明日は雨が降りますか？

(17) あなたは学生ですか？

のように、相手にイエスかノーかの判定をもとめる表現である。この表現と△推量形▽△推定形▽とのかかわりについてみていいこう。

まず、△推量形▽は、

(18) 明日は雨が降るだろうか？

(19) あなたは学生さんでしょうか？

のように、生起することができる。一方、△推定形▽は、

(20) *明日は雨が降るよう(だ)か／はず(だ)か／みたい(だ)か／らしいか／かもしれないか／ちがいないか？

のように、すべて、不自然である。

古典語ではどうか。古典語では、係助詞ヤ、カによって△判定要求▽が表現されていたとおもわれる。そこで、ヤ、カの結びになるかどうかについて、先の四作品でしらべてみると、△推量形▽は、

(21) 女御「草の文字はえ見知らねばにやあらば、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。
（常夏）

(22) 源氏「へいとぞしきに、そやうならむもののくさはひ、見出でまほしけれど、名のりもものうき際とや思ふらん、わらだこそ聞こえね。」と、ほほ笑みてのたまふ。
（同）

<推定表現>と<質問表現>の交渉

㉓ 源氏「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけん。かの戸の開きたりしによ」とのたまへば、

(野分)

㉔ 椎光「く、殿の御心おきてを見るに、見そめたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、く

のよう、例がみられる。一方、△推定形▽は、やはり、ベシ以外はヤ、カの結びとなることがない。

以上の事実によって、現代語、古典語の△判定要求▽の表現にかかるのは△推量形▽であり、△推定形▽はこれにかかることがわかる。

二・一・三 選択要求の表現

△選択要求▽の表現とは、△判定要求▽の表現が二つ以上連結し、そのどちらかの判断を相手に選択することを要求するものである。たとえば、

㉕ いつたい、歌うのか、歌わないのか？

㉖ 目的地は、高知か徳島か？

△判定要求▽と関係のふかい表現であることから、△推量形▽の生起、△推定形▽の不生起が予想される。はたして、△推量形▽は、

㉗ 歌うのだろうか、歌わないのだろうか？

㉘ 目的地は、高知だろうか、徳島だろうか？
のよう、生起するが、△推定形▽は、

(29) *歌うよ(だ)か、歌わないよ(だ)か／～はず(だ)か、～はず(だ)か／～みたい(だ)か、～みたい(だ)か
 /～らしいか、～らしいか／～かもしだれないか、～かもしだれないか／～にちがいないか、～にちがいない
 か

とすべて生起しない。

ところで、古典語では、

(30) 物よりのぞきなどして、それがあらぬかと見定めむ

(31) 年の内に春はきにけりひととせを こぞとやいはんことしとやいはむ

のように、△選択要求の表現とおもわれる例がいくつかみられる。しかし、発話者の単なる疑念ともとれるし、認定がむずかしい。

二・一・四 確認要求の表現

△確認要求の表現というのは、話し手が自己の判断をもちだし、相手に確認を要求する表現である。したがって、純粹に未知の情報をもとめていこうとした、△説明要求△△判定要求△△選択要求△△とは対照的な性格の質問表現といえよう。たとえば、

(32) 明日は休みじゃない?

(33) あなた、泣いてるのね?

などは、△明日は休みであるということ△△あなたが泣いているということ△△をもちだして、△ソーナンダネ△△と確認しているのであろう。△確認要求の表現には、△推量形△△推定形△ともにかかわっている。

<推定表現>と<質問表現>の交渉

(34) お店はもうかつてゐるんだらう?

(35) お店はもうかつてゐるようじやない／はずじやない／みたいじやない／らしいじやない／かもしけないじやない／にちがいないじやない?

△説明要求▽△判定要求▽△選択要求▽の表現にかかわらなかつた△推定形▽が、この△確認要求▽の表現にかかわつてくるという事実は注意しておく必要があろう。

一方、古典語で△確認要求▽にふかくかかわつているのは、終助詞カシをもちいた表現であろう。カシの意味は、一般に、△念押し▽△確認▽△表現をやわらげる▽などと理解されていいるけれども、本稿の立場から、もつとも注目されるカシの特徴は、△不定詞、および、カの係り結び文に生起しない▽ということである。⁽⁴⁾ この特徴と從来の理解とをかんがえあわせるならば、カシは△確認要求▽の表現の標識 (marker) とみてよそうである。さて、カシには△推量形▽△推定形▽とともに前接する。

(36) 源氏「久しう削ぎたまはざめるが、今日はよき日ならむかし」とて、

(葵)

(37) 空の色物の音も、春の調べ、響きはしないひとときたりけるけぢめを、人々思わくらむかし。夜もすがら遊び明かしたまよ。

(胡蝶)

(38) 国守参りて、御設け、例の大臣などの参りたまよりは、じとに世になく、仕うまつりけむかし。いとはしたなければ、

(鰐標)

(39) 「いづ方にもいづ方にもよりて、めでたき御宿世見えたるあまにて、世にぞおはせましかし。あさましくはかなく心憂かりける御心かな」など、

(鰐蛤)

(40) し、世にゆるさるまじきほどの事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけん、今の世には、すぎずきしく乱
りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし。
(若菜上)

(41) 今日は、ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、僧都「あはれ山伏は、かかる日にぞ昔
は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、
(手習)

(42) 馬頭「～男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取
り出ださむにはかたかるべしかし。
(帚木)

個別的な問題としては、ナリカシ、ベシカシ、マシカシの用例数がきわめてすくないことが注意されよう。

本項では、現代語、古典語ともにへ推量形／＼推定形／＼がへ確認要求／＼の表現にかかわっていることについて述
べた。

二・二 叙法副詞と質問表現

文末以外でへ判断のムード／＼にかかわるものとして、叙法副詞⁽⁵⁾がある。具体的には、

キット、カナラズ、ゼッタイ（ニ）、オソラク、タブン、サゾ、オオカタ、タイティ、タイガイ、ドウヤ
ラ、ドウモ、ヨホド（ヨッポド）、アルイハ、モシカスレバ（～シタラ）、ヒヨツトシタラ、コトニヨルト、ア
ンガイ……

などをあげることができよう。それらと質問表現とは、どのように交渉するであろうか。

<推定表現>と<質問表現>の交渉

結論を先にいえば、文末の△推定形▽とおなじ交渉のしかたをする。つまり、△説明要求▽△判定要求▽△選択要求▽にはかかわらず、△確認要求▽とのみかかわることになる。⁽⁶⁾ まず、

⑭ * いつ、たぶん試合が始まる？

⑮ * どうで、きつと昼食を食べる？

でわかるように、△説明要求▽の表現にはかかわらない。次に、

⑯ * よし子が大阪にいるのはたぶんか？

⑰ * 西川候補が当選するのはおそらくか？のように、△判定要求▽の表現ともかかわらない。また、

⑱ 彼は来るだろうか、来ないだろうか？

⑲ ピンチヒッターは、永尾だろうか、長崎だろうか、川藤だろうか？

とは言えても、

⑳ * 彼はたぶん来るだろうか、来ないだろうか？

㉑ * ピンチヒッターは、おそらく、永尾だろうか、長崎だろうか、川藤だろうか？

などは言えないから、△選択要求▽の表現ともかかわらないことがわかる。ところが、△確認要求▽ならば、

㉒ きっと、そうか？

㉓ ぜつたいにか？

のように、生起するものもある。ただ、意味するところの△確実度▽のひくいものは、生起しにくいようである。

㉔ ? たぶんか？

表 交渉の実態

判断ムードの表現形式 質問表現		推定形	推量形	叙法副詞
説明要求	(現)	×	○	×
	(古)	×	○	—
判定要求	(現)	×	○	×
	(古)	×	○	—
選択要求	(現)	×	○	×
	(古)	—	—	—
確認要求	(現)	○	○	○/×
	(古)	○	○	—

さて、交渉の実態を表にまとめておこう。

前節で見てきた交渉の実態をふまえて、△推定すること▽と△推量すること▽とのちがいについてかんがえてみ

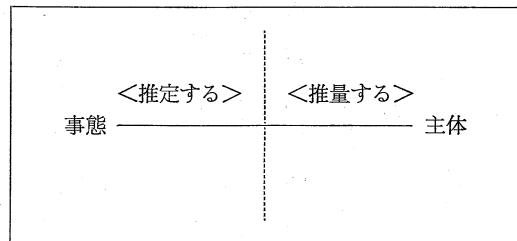
⑤?おそらくか?
 ⑥?ひょっとしたらか?
 ⑦?ことによるとか?
 これは、△確かにことがら▽をもちだして、相手に確認をもとめる、という△確認要求▽の基本的性格からすれば、当然のことといえよう。

なお、古典語では、叙法副詞が発達していなかつたので、質問表現との交渉を見ることができない。叙法副詞が発達していない分、△確實度▽のこまかい標示は、文末に託されていたものとおもわれる。たとえば、ヌベシ、ツベシ、テム、ナムなどのツ、ヌは、その標示にふかくかかわっていたのである(?)。古典語においては、現代語のように△ことがら▽の△確實度▽を分析的に表現するという必要性がなかつたという解釈も成り立つであろう。

三・一 事態と主体

<推定表現>と<質問表現>の交渉

図(3)



たい。具体的には、なぜ \wedge 推量形 \vee が質問表現（ \wedge 確認要求 \vee を除く）にかかわり、 \wedge 推定形 \vee がかかるないかについて考究することになるう。

まず、考究をはじめる前に、従来いわれてきた、 \wedge 推定形 \vee と \wedge 推量形 \vee の意味的性格を確認しておく。

\wedge 推定形 \vee は、 \wedge 詞的 \vee \wedge 客体的 \vee \wedge 事柄にちかい \vee といわれており、それとの比較において、 \wedge 推量形 \vee は、 \wedge 辞的 \vee \wedge 主体的 \vee \wedge 事柄にとおい \vee というとらえかたがなされている。これらを筆者なりにまとめると、 \wedge 事態—主体 \vee 間ににおいて、 \wedge 推定形 \vee は、事態よりに位置し、 \wedge 推量形 \vee は、主体よりに位置しているといえよう。（図3）

この位置づけは、いろいろな点から支持されよう。たとえば、相互承接の際、 \wedge 推定形 \vee が \wedge 推量形 \vee に上位すること。 \wedge 推定形 \vee はほとんどの活用形がそろっているが、 \wedge 推量形 \vee には、終止形とまれに連体形が存する程度であること。また、

(57) 彼女は結婚するらしかつた。

(58) 彼は落ち込んでいるみたいだつた。

(59) *彼は落ち込んでいるだらうた。

のようすに、 \wedge 推定形 \vee はすべてテンスが分化している⁽⁸⁾が、 \wedge 推量形 \vee には分化していない⁽⁹⁾こと。

(60) F君は人気者らしいのだ。

(61) F君はアルバイトをやめたようなのだ。

(62) *F君はアルバイトをやめただろうのだ。

のように、△推定形▽は、□ノダの□にふくみこまれるが、△推量形▽はふくみこまれないこと、など。△推定形▽が事態より、△推量形▽が主体よりに位置する判断の表現であることが了解されよう。こういう、△事態—主体▽間における位置関係のちがいが、質問可能か質問不可能かにかかわっているとおもわれる。

III・II 判断の根拠

従来、△推定▽と△推量▽のちがいについて、前者を△根拠にもどづく判断▽、後者を△根拠のうすい判断▽ととらえる見方もあつた。そこで、本項では、先に検討した△事態—主体▽間における△推定形▽△推量形▽の位置関係と関連づけながら、△根拠▽とのかかわりについて述べたい。

(63) 台風が来るので旅行は延期になるだろう／ようだ／はずだ／みたいだ／らしい／かもしだれない／にちがいない。

(64) 足をけがしたから出場は無理だろう／のようだ／のはずだ／みたいだ／らしい／かもしだれない／ちがいない。

のような、△ノデ從属節▽△カラ從属節▽は、判断の根拠となる事態をしめしているといえる。⁽¹⁰⁾主節においては、△推量形▽△推定形▽とともに生起するが、根拠をあらわす從属節において、あらわれ方にちがいがでてくる。つまり、

<推定表現>と<質問表現>の交渉

(65) 台風が来るような／はすな／みたいな／らしい／かもしれない／にちがいないので旅行は延期だ。

(66)* 台風が来るだらうので旅行は延期だ。

のよう、△ノデ従属節△には△推定形△は生起するが、△推量形△は生起しない。また、

(67) 台風が来るだらうがら旅行は延期しよう。

も、ややかたい印象をあたえる。これも、△推量形△に主体的色合が濃いため、確信をもつて△根拠△となる事態を述べあげる際にはもちいられにくいのではなかろうか。それに対して、主体的色合が稀薄で、事態よりの△推定形△は、△根拠△をしめす事態の世界にあるのだろう。

これとおなじような現象は古典語にもみられる。△已然形十バ△による確定条件法で原因、理由をあらわす節内には△推定形△が生起する。

(68) 母君「……若宮は、いかに思ほし知るにか、參りたまはむことをのみなん思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、」

(桐壺)

(69) 源氏「……経などもあまたありけるを、なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべき事ども、かの僧都の言はむに従ひてなむのすぐき」などのたまぶ。

(幻)

(70) 弁ぞ、「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとくらくおぼえはべるを、人もゆゆしく見思ふべければ、今は、世にあるものとも人に知られはべらじ」とて、

(早蕨)

それに対して、△推量形△はおこりえない。メバ、ラメバ、ケメバの用例はみられないし、マシカバ⁽¹¹⁾は仮定条件をあらわしている。

このように、現代語においても古典語においても、根拠となる事態を述べあげる際には△推定形▽がつかわれやすく、△推量形▽はきわめてつかわれにくいうことがわかる。

三・三 表現意図としての相違

ここで、いよいよ、△推定する▽という表現意図と△推量する▽という表現意図のちがいについて述べよう。

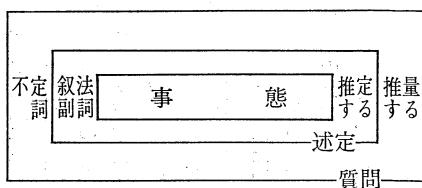
先に考察してきたように、事態を述べ定める（これを述定とよぼう）うえで、その述べ定め方にちがいがあった。それを△事態—主体▽間に位置づけてとらえようとしたわけである。したがって、それは、△推定すること▽△推量すること▽を述定の諸段階に位置づけることろみといえよう。そのなかで、△推定すること▽は、述定の範囲内にのみ存し、△事態を述べ定める▽という表現意図の影響をもろにうけている。のみならず、根拠をも表現しうる段階である。それに對して、△推量すること▽は、その影響がすくなく、述定の範囲をこえて質問と接觸する段階である。前者は、現象を写しとることの延長線上にあるが、後者は、現象をはなれて、発話者の心のなかを開いてみせている。したがって、両者は表現意図のレベルを異にすると言わねばなるまい。その境界線は、質問表現との交渉をとおしてうかびあがつてくるのである。

また、二・二で確認したように、叙法副詞も事態よりに位置し、述定の世界にとどまるであろう。一方、同じ副詞的成分であっても、△不定詞▽は事態からはなれて、△推量形▽や助詞カなどと相関して、質問表現を成り立たせている。

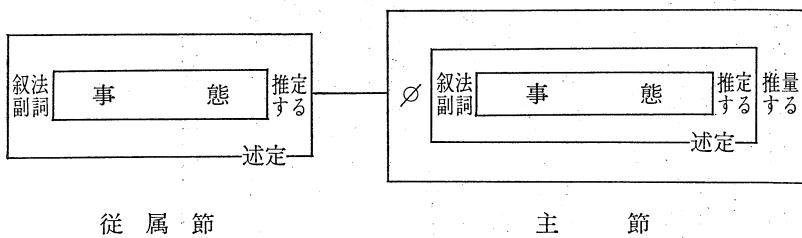
付言すれば、古典語では述定を積極的におしだす形式として、係助詞ナムをもちいた係り結びがあつた。△推量

図(4)

(i) 単文レベル



(ii) 複文レベル



※古典語では叙法副詞が無標(unmarked)になる。

△推定すること▽と△推量すること▽というレベルのちがう二つの表現意図は、古代から現代にいたるまで、脈々と生きつづけてきた。そのなかで、現代語における△推定形▽の種類の豊富さは、事柄的意味を重んじ、分析的表現をこむ近現代日本語の傾向の一つのあらわれである

単文レベル、複文レベルの文構造における△推定する▽と△推量する▽の位置づけを図4にしめし、まとめてみよう。

おわりに

四まとめ

△がナムの結びになりにくく、△推定形▽が比較的になりやすいのも、そのあらわれであろう。その意味で、△ナム一ケル▽を△物語る文体▽⁽¹²⁾ととらえることは、ただし理解であるといえよう。

う。

注

- (1) 仁田義雄 (1985) 参照
- (2) ヨウダ、ラシイが疑問化でぎなんじいじひへんじば、國廣哲彌編 (1982)、寺村秀夫 (1984) などに指摘がある。ただし、△反問▽は可能である。
- (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10)
- (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)
- (21)
- △の例は、すでに、松尾捨治郎 (1936) が指摘している。
- 佐田智明 (1978) に指摘がある。
- 川端善明 (1983) では、叙法副詞のあらわす△推定▽を疑問と対立的に位置づけている。
- 通時的にみれば、ツ、ヌの消滅と叙法副詞の発達とは相関があるかもしれない。
- 仁田義雄 (1981) はタの下接しる△判断のムード▽の表現形式を△擬似ムード▽とよんだ。
- 古典語の△推定形▽にもテンスの分化がみられる。たとえば、メリキ(ツ)、ナリキ(ツ)、ベカリキ(ツ)など。
- △ノデ従属節▽と△カラ従属節▽の表現性のちがいについては、言語学研究会 (1985) にくわしい記述がある。
- 原因的なつきそい・あわせ文において、つきそい文が「するので」のかたちをとるばあいは、つきそい文もいいおわり文も、はなし手である△私▽の意識のそで進行しているリアルな出来事をえがきだしている。
- 中略—
- これにたいして、「するから」のかたちをとるばあいは、この原因・結果の関係は、はなし手である△私▽が設定するというすがたをとてあらわれてくる。その意味では主体的である。
- 山口堯一 (1987) では、このようなマシンを未然形とみていて、
- もし、已然形の「ましか」に接続助詞「ば」が接しるるものなら、はたらかの上や「まし」とも近い「む」の已然形「む」にも、「めば」という形の用法があつてよさそうに思うが、そのような形は見当らないであろう。

といふ。

(12) 阪倉篤義 (1956) に、

「なむ」という助詞もまた、本来、聞き手への確かめを意図して用いられるものであつて、かくしていに、「なむ……ける」という形を持った表現は、いわゆる「物語る」という叙述の様式にとって、正にふさわしいものであり得たのである。

とある。また、和歌においてナムの係り結びがきわめてすくないことも、その表現意図に起因するとおもわれる。

参考文献

- 松尾捨治郎 (1936) 『国語法論叢』(文学社)
- 阪倉 篤義 (1956) 「竹取物語の構成と文章」(『国語国文』昭31・11 後に『文章と表現』・角川書店 に所収)
- 森重 敏 (1959) 『日本文法通論』(風間書房)
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型I』(秀英出版)
- 山口 堯二 (1967) 「[まし]の意味領域」(『国語国文』昭43・5 後に『論集日本語研究7・助動詞』・有精堂 に所収)
- 佐田 智明 (1978) 「平安朝における終助詞「かし」について」(『春日和男教説記念語文論叢』昭53・11・桜楓社)
- 仁田 義雄 (1981) 「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」(『国語と国文字』昭56・5 特集号)
- (1985) 「文の骨組」(『応用言語学講座1・日本語の教育』・明治書院 所収)
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」(『国立国語研究所報告』71)
- 國廣哲彌編 (1982) 『いとばの意味3』(柴田武氏担当部分・平凡社)
- 川端 善明 (1983) 「副詞の条件」(『副用語の研究』・明治書院 所収)
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』(くろしお出版)
- 南 不二男 (1985) 「質問文の構造」(『朝倉日本語新講座4・文法と意味II』所収)
- 言語学研究会 (1985) 「条件づけを表現する「あわせ」・「あわせ文」」(『教育国語』82・昭60・9)
- なお、質問表現の理解については、宮地裕 (1979) 『新版文論』(明治書院) (第一章文の意味「会話・表現文・文」および、「疑問表現」) に示唆を得たところが大きい。
- (大学院前期課程学生)